

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2024.12.27

VOL.

169



加納南9号墳出土品（氷見市加納）
《須恵器蓋・須恵器杯》

杯は食べ物を盛る器だったと考えられています。古墳時代の杯は、外側の一部が横にとび出ていますが、これは蓋を受けるためです。あらかじめこの形で作られていることから、杯と蓋はセットで使っていたことが分かります。写真の須恵器は古墳の墳丘上から出土しました。葬送の儀式の際の飲食に使われたものでしょうか。

とっておき埋文講座① ● 特別展「と・YAMATAI 国」

② ● 弥生時代から古墳時代への変革と青銅器の生産・流通

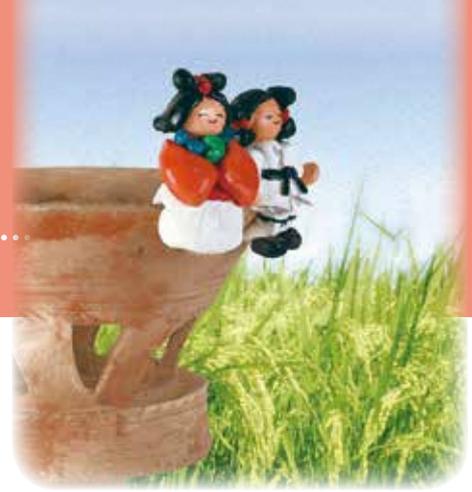
Center Flash ● とやま埋文友の会・考古学少年団

古写真発掘！ ● 浦山寺蔵遺跡 黒部市宇奈月町浦山

富山県埋蔵文化財センター

特別展「と・YAMATAI国」

とっておき埋文講座①



弥生時代のイメージ

皆さんは弥生時代をどのようなイメージで捉えていますか。歴史の教科書には、大陸から伝わってきた稲作を行い、銅鐸や銅剣、銅矛などの青銅器を使って豊作を祈る祭りを行う人々の姿が書かれています。そして邪馬台国の女王卑弥呼が活躍したのも弥生時代の終わり頃です。

しかし富山県では青銅器は出土しませんし、稲作を始めたのも中期以降とかなり遅い時期です。邪馬台国は所在地論争が盛んですが、富山はその候補地ではありませんし、卑弥呼が治めたとされる「倭国」にも含まれるかどうか微妙です。

このように発掘調査でわかった富山の弥生時代の実態に迫りつつ、しかし“ないない尽くし”の残念な姿ではなく、実はすごい技術を持ち、懸命に働き、楽しく暮らしていたのではないかという様子を紹介するのが今回の展示の目的です。富山の弥生遺跡“と・YAMATAI国”の村”を詳しく見ていきます。



弥生時代のイメージを解説するパネル

“と・YAMATAI国”の鏡

教科書には、邪馬台国の女王卑弥呼が中国に使者を送り、倭国全

体を統治する倭王の称号と金印、銅鏡100枚を得たと書いてあります。邪馬台国の候補地がある九州や近畿では大きな銅鏡が数多く出土しています。銅鏡は権力者のみが所有できる政治的な威信材であり、鏡の持つ僻邪（へきじや 邪悪なものはね返し遠ざける）という性格から、王墓に副葬されたり死者を封じ込める呪具や葬具として使われたりしました。一方富山では、集落遺跡から小型仿製鏡がわずかに出土します。そのほとんどが水が湧き出る溝や落ち込みから見つかるため、水の清らかさや豊かさを祈る祭祀に用いられたと考えられます。鏡の持つ性格や使われ方が変化すると想像されます。



小型仿製鏡の展示

下老子笹川ムラ

～縄文人の村～

弥生時代の開始年代について、国立歴史民俗博物館は、放射性炭素年代測定結果に基づき紀元前10世紀後半と提唱しています。しかし富山で弥生文化が受け入れられるのは、そこから500年以上も経った紀元前4世紀頃と考えられています。この長い過渡期の遺跡を「縄文人の村」と名付けました。下老子笹川遺跡（高岡市）から、県

内では珍しい縄文時代晩期後半の集落が見つかっています。縄文土器付着炭化物の放射性炭素年代測定では、紀元前8世紀後半～紀元前5世紀中頃の年代が出ています。西日本では弥生時代に入っていた頃、富山は縄文時代の暮らしが続いていたというギャップを示しています。



展示風景 ～縄文人の村～

下老子笹川ムラ

～米作りの村～

下老子笹川遺跡では弥生時代終末期から古墳時代中期にかけての大規模な水田や水路を検出し、炭化米も多く出土しています。県内遺跡出土の炭化米DNA分析では、温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカに加えて、両者の雑種を検出しています。熱帯ジャポニカは温帯ジャポニカに比べて乾燥に強く、丈は高く、お米の粒は大きく長細いという違いがあります。弥生人は日照りや冷害、長雨や干ばつ等の気候変動に対応できるよう、様々な種類のイネを育てていたことがわかります。展示では炭化米の他、稲穂を摘む石包丁、調理用の甕、

種^{たね}籾^{もみ}貯蔵用の壺、高床倉庫の梯子^{はし}、農耕具など米作りに関連する出土品を並べました。また大きさがわかるように水田を原寸大に印刷したシートを敷き、石包丁で稲穂摘みをする人形を配置しました。



稲穂摘みをする人形と原寸大の水田シート

下老子笹川ムラ

～玉造りの村～

富山は緑色凝灰岩^{りょくしよくぎょうかいがん}や鉄石英、ヒスイ等の石材の産地に恵まれており、縄文時代から球状耳飾^{けつじょうみみかざり}や大珠^{たいしゅ}、勾玉^{まがたま}等を作り続けてきた技術と伝統があります。県内の弥生集落では、その多くで玉造りが行われていました。下老子笹川遺跡では弥生中期から後期の玉造集落がみつかり、製作技術の変遷を追うことができます。展示では勾玉や管玉の未成品や完成品の他、穿孔具^{いしぼり}の石針^{てつきり}や鉄錐、石材を分割する敲石^{たたきいし}や石鋸^{いしのこ}等を並べました。



展示風景 ～玉造りの村～

江上Aムラ ～農耕の村～

江上A遺跡^{えがみ}（上市町^{かみいちまち}）は竪穴住居や小屋、高床倉庫、柵、井戸で構成されます。近くには橋のかかった大溝^{おおみぞ}が巡らされ、当時の集落の様子がよくわかります。溝や建物

の周溝^{くわ}から、鍬^{すき}や鋤^{うす}、えぶり、臼^{うす}など多くの農耕具が出土しました。



展示風景 ～農耕の村～

弥生時代には、モモ、ヒョウタン類、アサ、クワ、ノブドウ、サンショウ属、シソ属、ナス科、メロン類等が栽培されていました。モモは神聖な食物とされ葉でもあったようです。クワは葉が養蚕用、実が食用です。アサは茎の繊維を利用していました。これらは種実が出土していますが、種実そのものが出土しなくても何の植物があったのかを知る研究として、レプリカ法を紹介しました。これは土器表面の微小な穴にシリコンゴムを流し込んで型を取り電子顕微鏡で観察する方法で、アワの種実圧痕等を見つけることができました。



栽培植物の展示

惣領浦之前ムラ

～祭りの村～

惣領浦之前遺跡^{そうりょううらのまえ}（氷見市^{ひみ}）の溝から、盾や刀、剣といった武器形木製品が多く出土しました。朱漆塗りの盾や肩甲の表面には鳥の羽が挿してあったと想像される穴がたくさんあいています。銅鐸^{たて}や絵画土器に描かれる鳥装^{かたよろい}の人物、そして獅子舞^{ちようそう}のような勇壮な舞が彷彿とさ

れます。こうした凝った装飾や貴人が使う団扇形木製品^{うちわがたもくせいひん}の出土は、祭祀を司る支配者層の存在を示唆するのではないのでしょうか。



展示風景 ～祭りの村～

なお、展示室内2箇所^{2か所}に設けた動画コーナーでは、博物館実習生達が当時の暮らしや弥生祭祀の様子を想像して演じています。

南太閤山Iムラ

～方形周溝墓の村～

南太閤山I遺跡^{みなみたいこうやまのい}（射水市^{いみず}）は見晴らしの良い丘陵尾根上に築かれた墳墓群です。方形周溝墓から出土した祭祀土器のセットや副葬品の玉類を展示しました。

ムラ自慢コーナー



ムラ自慢コーナー

展示の最後は各遺跡自慢の一品が集うコーナーです。長さ3mを超える柄や大型田舟、建築用の水準器等、展示の機会が少ないものの、どれも県が誇る出土品です。来館者による投票で、と・YAMATAI 国のNo.1が決定します。集計結果は後号の紙面でお知らせします。

（朝田 亜紀子）

弥生時代から古墳時代への変革と青銅器の生産・流通

とっておき埋文講座②

島根大学法文学部考古学研究室 准教授 岩本 崇

はじめに

弥生時代、古墳時代といった時代名称は皆さんよく耳にされていると思います。この二つの時代を考える上では、青銅器が重要な鍵となる資料として注目できます。そこで以下では、青銅器の日本列島への入り方や、作られ方、どのように使われ、各地に広がっていったのかなどの問題から、弥生時代から古墳時代へと大きな変革を伴って転換した点についてお話しします。



弥生青銅器の変遷

(島根県古代出雲歴史博物館2012『弥生青銅器に魅せられた人々—その製作技術と祭祀の世界—』)



樺井大塚山古墳に副葬された三角縁神獸鏡

(京都大学文学部1989『樺井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』)

弥生時代／古墳時代のシンボル

弥生時代のシンボルには、近畿・東海の銅鐸や九州・中四国西部の武器形青銅器などの大型青銅器、中国地方南部の特殊器台、あるいは山陰や富山の四隅突出型墳丘墓などがあります。日本列島で地域ごとのばらつきの大きい点が弥生時代のシンボルの特色です。

こうした状況は、古墳時代になると一変します。各地に前方後円墳が築造され、規模の大きなものは近畿に、近畿から離れるにつれて小さなものになっていきます。そこには近畿を中心とした広域的な社会関係が窺えます。この社会関係がよく見える考古資料が、三角縁神獸鏡などの銅鏡です。同じ鑄型を使った、同じ文様の三角縁神獸鏡(同範鏡)が、日本列島各地の古墳から副葬品として出土する現象は広域におよぶ社会関係なくしては説明できません。

弥生時代青銅器とその変遷

弥生時代の代表的な青銅器に、武器形青銅器と銅鐸があります。弥生時代中期に始まった列島の青銅器生産は、この二つを中心に進み、時期を追って大型化し、それぞれは本来の機能を失っていきます。武器形青銅器は鋭利さを欠くようになり、銅鐸も音を鳴らすので

はなく、どちらも見せる祭器としての性格を強めていきます。

祭りの道具になった武器形青銅器や銅鐸は、特定個人の墓に副葬されないことから、個人の財産ではなく、ムラなどの集団全体で管理・保有される器物であったといえます。

弥生青銅器は、弥生時代にその使用を終えます。しかし、当時の人たちは弥生時代、古墳時代という時代区分を知っているわけではありません。弥生時代と古墳時代では何が異なるのでしょうか。その違いを考えるため、弥生時代から古墳時代への変化と画期についての三つの考え方をみておきましょう。

古墳時代の開始と銅鏡の分配・副葬

(1) 画期的古墳出現論

まずは弥生時代から古墳時代の変化を大きな変化だとする考え方です。

この理解は、古墳時代のシンボルである、三角縁神獸鏡の同範鏡の分布状況を重視した解釈と深く関わります。小林行雄さんが提唱された「同範鏡論」と呼ばれる考え方で、同範鏡が近畿にたくさん存在し、離れた地域になると減っていくことから、近畿を中心として日本列島の広範囲におよぶ地域と関係が成立したとみなします。

同じような考えの近藤義郎さんは成立期の前方後円墳の三つの特徴として、鏡の大量副葬、長大な割竹形木棺、前方後円墳という墳丘形態が日本列島の広域に広がる点を挙げています。

都出比呂志さんも、古墳時代が地域を越えた首長間の政治的同盟関係の成立によって始まったとします。その根拠として三角縁神獸鏡を挙げ、その同範鏡の分有関係を重視しています。

古墳時代になると、京都府の樺井大塚山古墳や奈良県の黒塚古墳などで、完全な形の鏡を大量に副葬します。これは弥生時代にはなかった現象です。

重要なのは、青銅器は弥生時代、特に後期段階に列島規模では特定個人に帰属しない点です。それが古墳時代になるとお墓に大量に副葬され、個人が貴重な財を独占する状況が生じます。権力が集団の中の特定の人に集中する状況が生まれてくるのです。こうした財の保有が古墳の築造とともに、三角縁神獸鏡など鏡を入手することと一緒に、近畿地方を中心にして列島各地に広がっていったと考えられます。

(2) 段階的古墳出現論

一方で、弥生から古墳時代への変化を緩やかにとらえる考え方もあります。

寺沢薫さんは、^{まきむく}纏向型前方後円墳という前方部の短いタイプの前方後円墳

の広がり、三角縁神獸鏡や箸墓古墳より前の段階にすでにあったと考えました。寺沢さんが示された前方部の短いタイプの前方後円墳は、三角縁神獸鏡と同様、広く分布するように見えますが、ほとんどの古墳が箸墓古墳より後の古墳であり、箸墓古墳以前のは近畿を中心としたごく限られたエリアにしか存在しません。ですので、これをもって列島規模の広域的な関係が形成されたとは考えられません。

また、岡村秀典さんや福永伸哉さんは、三角縁神獸鏡の直前段階の鏡である画文帯神獸鏡が、三角縁神獸鏡に先行して近畿の王権から各地に流通した可能性を重視します。鏡の政治利用が三角縁神獸鏡よりも前の段階で始まっているので、古墳時代の萌芽的な社会関係が早くに成立していたと考えます。

では、こうした段階的に古墳が出現したとする考えをみとめるならば、何をもって古墳時代と定義すればよいのでしょうか。もしも画文帯神獸鏡が三角縁神獸鏡や箸墓古墳よりも前に近畿を中心に広がっていたとすると、そうした中心と周辺からなる社会システムが出来たところで、古墳時代の開始を画した方が素直だろうと考えます。

ところが、今のところそうは考えにくい状況にあります。当初は近畿に少なく九州に多い鏡の分布が、3世紀前葉ごろに九州の分布が薄く、近畿が濃密になります。そのため、ここで時代を画する考え方は、先ほどの画文帯神獸鏡が三角縁神獸鏡よりも前に副葬されていた、流通していたとする見方と一致します。しかし近年、一口に画文帯神獸鏡といっても、製作地を異にする流派の存在がわかっています。三角縁神獸鏡は製作地が一か所で、近畿の王権がまとめて入手し、各地に分配していたと考えるのですが、画文帯神獸鏡の場合はこの論理を適用できません。バラバラに生産されていた鏡を王権がかき集めて分配した、または中国で作られたものが日本列島にバラバラで入ってくるので、製作から流通、副葬までを一つのパッケージとして捉えづらく、画文帯神獸鏡を一か所から列島各地に流通したものととらえて古墳時代の開始の議論に繋げることが難しいのです。

(3) 早期古墳論

早期古墳論は、石野博信さんや、間壁忠彦さんと間壁葎子さんらが提唱され、大きな墳墓を古墳とみなす考え方です。弥生時代の後期後葉に造られた岡山県の楯築墳丘墓であるとか、あるいは島根県の西谷墳墓群、富山県の杉谷4号墓のような四隅突出型墳丘墓をもって古墳時代の開始とします。

四隅突出型墳丘墓を古墳とするわけですから、その後の前方後円墳との関係性を小さく見ることになります。問題は、大きな墳墓を造っているところもあれば、ほとんど造らないところもあるなど地域差があることです。また、九州や近畿では、弥生時代の青銅器をまだシンボルとして使っているため、シンボルの違いが地域差としてある点を非常に説明しづらくなります。さらには、四隅突出型墳丘墓では鏡の副葬は行われない一方、九州では同時期に鏡の副葬を行うなどの違いもあります。確かに部分部分では古墳時代につながる要素が見えますが、そうした特定要素だけで古墳時代の開始を引き上げる見方には、どうしても無理が出てきます。

私は近畿を中心とする社会が安定的にみられる点を重視して、(1)の画期的に古墳時代への転換が起こったと考える立場です。以下では、この画期性のある時代の転換について、鏡の最新の研究成果をもとにお話しましょう。

青銅器生産の変革と青銅器原料

銅鐸や武器形青銅器は、弥生時代後期の終わり頃に生産を終了します。そこから弥生時代終末期を経て古墳時代までの、青銅器生産の実態を把握するうえで考古学的に注目できるのが銅鏡です。

鏡は何に使ったのかがはっきりしないアイテムである点でデメリットもありますが、特定の機能に縛られない点が、豊富なデザインを生み出すことにもなっているので、鏡を細かく見ることでいろいろなことがわかります。

鏡を作った鑄型の素材はなにか、文様はどのように刻まれたのか、原料がどのように調達されたかなどです。

弥生時代の九州では石の鑄型を使って鏡を製作し、鑄型は一つの遺跡から

だけではなく、いろいろな遺跡から出てきます。つまり、九州では分散的に鏡の製作を行っていました。鏡だけではなく、武器形青銅器も鑄型の出土例から単一の場所で作られていたわけではなく、複数の生産拠点で分散して作られていたことがわかっています。中国鏡はこの時期、土の鑄型を使っていますが、日本列島では中国のものを真似て鏡の生産を行っているのに技術は異なります。

ここでは鏡を大きく①から④までの四つに分けて説明をします。鑄型の素材と、文様の施し方、研磨の仕方などからカテゴリーを設定しました。

①は、石の鑄型で作った小型の鏡です。硬いので、回転対称性、要するに正円をなさない部分が大きいものです。



福岡県井尻B遺跡出土の石範(①の鏡)

②は、土の鑄型を使っているものです。これらも回転対称性は高くないので、コンパスを使う技術によるものではないと思います。但し、土の鑄型は石と比べると軟らかいので、細かい線が描きやすくなります。氷見市の上久津呂中屋遺跡の鏡は細かい線が多く、典型的な土の鑄型で作ったタイプといえます。また、上市町の中小泉遺跡の鏡も土の鑄型によるものですが、色が上久津呂中屋の鏡と比べて赤っぽく、銅の成分比が高めです。中国の鏡は錫の割合が高いので、赤味がありません。弥生時代の日本列島産の鏡は基本的に錫の割合が低いのですが、弥生時代の終わりになると、錫の使用量がさらに減少します。列島産の原料で生産が始まるのは古墳時代後期の6世紀後半です。それまでは原料を列島外に依存していたため、高価な錫は少なくしてコスト削減を図っていたようです。



左：上久津呂中屋遺跡 右：中小泉遺跡
非九州系の弥生倭鏡(②の鏡)

③は、先の二つと同じように小さい鏡ですが、特定のデザインのものが存在していて、これらは高い回転対称性を持ちます。土の鑄型を使用したもので、小型鏡のみの製作です。

④は、古墳時代前期の倭鏡です。小型の鏡だけでなく、中型鏡、大型鏡もあります。文様もより複雑ですので、土の鑄型を使用し、施文の仕方、文様を刻む技術も変化したものと考えられます。



大阪府郡遺跡
(③の鏡)

滋賀県雪野山古墳
(④の鏡)

大きくは、この四つのグループは①・②→③→④の順で、弥生時代後期から古墳時代前期に生産されました。弥生時代には九州と九州以外の地域で作られていたと考えられます。②の土の鑄型のタイプは、分布を見てもどこかに集中する傾向もないので、九州以外のどこで生産されていたかを明確にはできません。ただ、九州に分布が集中しませんので、鑄型の素材の違いは製作地の違いを表していると考えています。

以上の①から④までの鏡の分類をもとに、ここからは原料の話をしていきましょう。1970年代から鉛同位体比を調べて鉛の原料産地の違いを明らかにする研究がなされるようになり、その成果は考古学でも活用されています。

これまでの研究結果では前漢鏡の鉛同位体比は、主にA領域の範囲に位置することがわかっています。そして、後漢鏡のある段階からはB領域の範囲に変わります。またこれとは別に朝鮮半島系の青銅器に顕著なDラインに位置する鉛の存在もわかっています。

では、弥生時代後期の青銅器の原料はどうでしょうか。注目できる現象として、弥生時代後期でもやや時期が進むと、鉛原料はA領域中のかかなり狭い範囲にあるa領域にまとまる状況がみられます。九州、近畿、関東と製作地が違う青銅器でも同じ原料が使用されるのです。これは同じ原料が大量に日本列

島に持ち込まれ、列島各地に広がったことを意味しています。各地で青銅器の品目に差があるので、原料は経済的に流通した可能性が考えられます。

話を鏡に戻して鉛原料の推移を見ていきましょう。先の分類の①の鏡は、Dライン鉛とA領域鉛が混じる段階から、A領域鉛を主体とする段階を経て、a領域鉛の段階へと時期的に変化します。②の鏡でも同じ変化をしたと考えられます。③の鏡は、A領域鉛が残存しますが、B領域鉛が一定数含まれるようになります。③でも新相を示す鏡の場合は、B領域鉛が主体となります。④の鏡はA-B領域間の鉛もわずかにありますが、多くはB領域鉛となります。

以上から、原料にみる画期は、③の鏡が出現・定着する段階にあり、A領域鉛からB領域鉛への変化が起こっていることがわかります。これにあわせて鏡の作り方も変わり、文様の精緻なものを作る技術が駆使されるようになります。原料だけでなく作り方も変化した可能性が考えられます。

さらに最近、私が重要視しているのは、青銅器の重量です。滋賀県大岩山遺跡からは24個の銅鐸が出土しています。日本でも最大サイズの銅鐸が確認されており、24個分の総重量は約250kgと推定されます。

鏡の場合だと、大型鏡である三角縁神獣鏡でも約1kg、重くて約1.5kgですので、30面以上が副葬されていた樺井大塚山古墳や黒塚古墳など、古墳時代の中でかなりの有力者であっても持ち得た青銅器の重さは40kg程度にしかありません。



滋賀県大岩山銅鐸
(一宮市博物館2001『銅鐸から描く弥生社会』
～埋められた銅鐸の謎～)

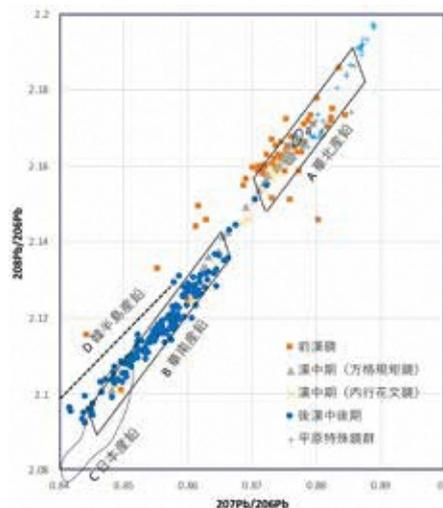
また、単純に青銅器の重量を比較すれば、古墳時代は弥生時代の1割程度にとどまるとの試算があります。このことは、弥生時代と古墳時代とは、重要なシンボルである青銅器を製作する資源量が同一ではなかったことを示しています。弥生時代と古墳時代の青銅器は同じ価値を有していたわけではなかったのです。

まとめ

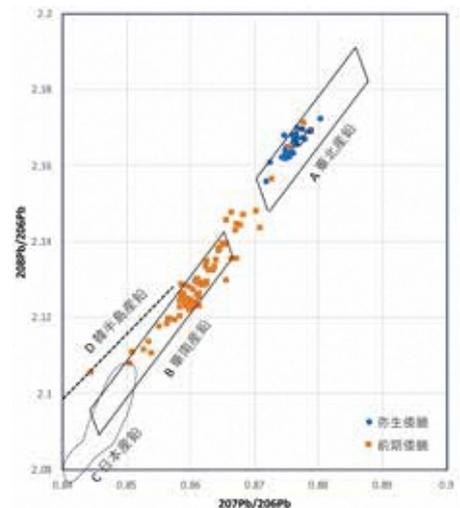
青銅原料が豊富であった弥生時代。しかし、それにつづく古墳時代は、中国での後漢王朝滅亡の影響か、原料の入手が困難になります。限られた資源を獲得するため、社会がまとまって対応する。それが倭王権という権力集中体制につながっていく。そこが古墳時代への大きな転換点であったと考えています。

(令和6年10月27日)

第3回 県民考古学講座)



時期別に見る漢鏡の鉛同位体比



弥生倭鏡と古墳前期倭鏡の鉛同位体比

とやま埋文友の会

当センターでは、展示及び普及事業に積極的に参加し、郷土の歴史や文化財への理解を深めていただくとともに、会員相互の親睦と交流を図っていただくことを目的に「埋文友の会」を設立し、平成16年4月から活動を行ってきました。会員の募集は毎年3月から行っていますので、興味のある方、考古学や歴史の知識を広めたい方、奮ってご入会ください。お待ちしております。

活動

- ① 会報「友の会ニュース」の発行
- ② 遺跡探訪バスツアー〈日帰り〉(参加費別途)の実施
- ③ 展示解説会の開催
- ④ 冬のじっくり講座の開催

この4つは会員限定です!

特典

- ① 当センター発行の
展示図録・所報「埋文とやま」が届きます
- ② 当センターが行う展示の案内が届きます
- ③ 当センターが行う県民考古学講座の案内が届きます
- ④ その他県内外の考古学情報などが届きます

会費

年1,000円 (年度途中の入会でも会費は同額となります)

会員の期間

4月1日もしくは入会した日から、翌年3月末まで

お問合せ

富山県埋蔵文化財センター 友の会担当まで

遺跡探訪バスツアー



令和6年11月9日(土)開催

冬のじっくり講座のようす



令和6年2月24日(土)開催

令和6年度 文化庁 地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業

考古学の研究者を目指したい!!

日本の歴史をもっと深く理解したい!!

考古学の博物館
富山県埋蔵文化財センター

本物の土器や石器に触れてみたい!!

Archaeological Youth Club

考古学少年団

団員募集中!

第2回 考古学少年団のようす



令和6年6月23日(日)開催

考古学を学んでみたい方、日本の歴史を深く理解したい方、本物の土器や石器に触れてみたい方は、「考古学少年団」の団員になってみませんか。

団員は随時募集しており、応募のしめ切りはありません。

興味のある方は、お気軽に当センターへお問い合わせください。

団員資格	県内の小学6年生～中学3年生(義務教育学校6～9年生)
団員の期間	入団の日から中学校卒業まで ※毎年3月に継続の確認をします。いつでも入団可能です。
活動場所	富山県埋蔵文化財センター ほか
活動の回数	年間10回(月1回)程度 ※主に日曜日(土曜日・祝日の場合もあります)の午後2～3時間程度。毎回参加しなくてもOK。 ※くわしい活動の場所・時間・内容は、手紙でお知らせします。
団員手帳	入団した方には団員手帳を発行します。
費用	入団費・会費ほか、 すべて無料
保険	当センターでレクリエーション保険に加入します。

《申し込み方法》当センターのホームページから、申込用紙をダウンロードして郵送してください。

古写真発掘!—《23》



うらやまてらぞう 浦山寺蔵遺跡

昭和51年（1976年）撮影 黒部市宇奈月町浦山

浦山寺蔵遺跡は、旧宇奈月町の黒部川左岸の標高125m～140mの丘陵裾部に立地します。

昭和50（1975）年度に実施された宮野用水の改修工事中に発見され、昭和51（1976）年に、ほ場整備事業に先立ち調査が行われました。

発掘調査は、A・B・Cの3地点の合計750㎡を発掘調査し、その結果、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡15棟やたくさんの土器が見つかり、天神山式の土器としてよく紹介されています。

上の写真は、B地点を西から撮影したものです。下の写真は、当時の発掘調査の様子です。

来年の干支は「巳」、当センターでは、令和7年1月15日(水)まで「干支にちなんだ展示」として、浦山寺蔵遺跡から出土した浅鉢も展示しています。この浅鉢の口縁部にあるギザギザ文様がまるでヘビのようです。



浦山寺蔵遺跡から出土した浅鉢

編集後記

先日、当センターが主催する「考古学少年団」で鏡の解説をしました。内容はまさに、今号の4ページに掲載している、岩本先生のご講演の「古墳時代の開始と銅鏡の分配・副葬（1）画期的古墳出現論」の話をわかりやすく解説したのですが、小学6年生から中学3年生の団員たちにとっては、ちょっと難しい話だったようです。中には熱心にきいてくれる団員もいて、この中から将来、1人でも考古学を専門的に学んでくれればと願うばかりです。（担当 青山）

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.169

令和6年12月27日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814
URL <https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html>

